

チュウリップの幻術

宮沢賢治

青空文庫

この農園のうえんのすもものかきねはいっぱいに青じろい花をつけています。

雲は光つて立派りっぱな玉ぎよくずい髓おきものの置物おきものです。四方の空を繞めぐります。

すもものかきねのはずれから一人の洋傘ようがさ直しが荷物にもつをしよつて、この月光をちりばめた緑みどりの障壁しょうへきに沿そつてやつて来ます。

てくてくあるいてくるその黒い細い脚あしはたしかに鹿しかに肖にています。そして日が照てつているために荷物の上にかざされた赤白だんだらの小さな洋傘は有平糖あるへいとうでできてるように思われます。

(洋傘直し、洋傘直し、なぜそうちらちらかきねのすきから農園の中をのぞくのか。)

そしててくてくやつて来ます。有平糖のその洋傘はいよいよひかり洋傘直しのその顔はいよいよ熱ほてつて笑わらっています。

(洋傘直し、洋傘直し、なぜ農園の入口でおまえはきくつと曲まがるのか。農園の中などにおまえの仕事しごとはあるまいよ。)

洋傘ようがさ直しは農園のうえんの中へ入ります。しめつた五月の黒つちにチュウリップは無雑作むぞうさに並ならべて植うえられ、一めに咲さき、かすかにかすかにゆらいでいます。

(洋傘直し、洋傘直し。荷物をおろし、おまえは汗を拭いている。そこらに立ってしばらく花を見ようというのか。そうでないならそこらに立っていけないよ。)

園丁がこてをさげて青い上着の袖で額の汗を拭きながら向うの黒い独乙唐櫓の茂みの中から出て来ます。

「何のご用ですか。」

「私は洋傘直しですが何かご用はありませんか。若しまた何か鋏でも研ぐのがありましたらそちらのほうもいたします。」

「ああそうですか。一寸お待ちなさい。主人に聞いてあげましょう。」

「どうかお願いいたします。」

青い上着の園丁は独乙唐櫓の茂みをくぐって消えて行き、それからぽつと陽も消えまして。

よつほど西にその太陽が傾いて、いま入ったばかりの雲の間から沢山の白い光の棒を投げそれは向うの山脈のあちこちに落ちてさびしい群青の泣き笑いをします。

有平糖の洋傘もいまは普通の赤と白とのキャラコです。

それから今度は風が吹きたちまち太陽は雲を外れチュウリップの畑にも不意に明るく陽

が射さしました。まつ赤かな花がぷらぷらゆれて光ひかりっています。

園えんてい丁ていがいつか俄にわかにやつて来てガチャツと持もつて来たものを置おきました。

「これだけお願ねがいするそうです。」

「へい。ええと。この剪せん定てい鋏さきみはひどく振ねじれておりますから鍛かじ治じに一いペンおかけなさいないと直ただりません。こちらのほうはみんな出来ます。はじめにお値ねだん段だんを決きめておいてよろしかったらお研とぎいたしましょう。」

「そうですか。どれだけですか。」

「こちらが八せん錢せん、こちらが十せん錢せん、こちらの鋏さきみは二ちよう丁ちようで十五せん錢せんにいたしておきましょう。」

「ようござんす。じゃ願ねがいます。水みづがありますか。持もつて来てあげましょう。その芝しばの上うへがいいですか。どこでもあなたのすきな処ところでおやりなさい。」

「ええ、水みづは私わたしが持もつて参まります。」

「そうですか。そこのかきねのこつち側がわを少し右みぎへついておいでなさい。井い戸どがあります

。」

「へい。それではお研とぎいたしましょう。」

「ええ。」

園丁はまた唐檜の中にはいり洋傘直しは荷物の底の道具のはいった引き出しをあけ缶を持って水を取りに行きます。

そのあとで陽がまたふつと消え、風が吹き、キャラコの洋傘はさびしくゆれます。

それから洋傘直しは缶の水をぱちやぱちやこぼしながら戻つて来ます。

鋼砥の上で金鋼砂がじやりじやり云いチュウリップはぶらぶらゆれ、陽がまた降つて赤い花は光ります。

そこで砥石に水が張られすすと払われ、秋の香魚の腹にあるような青い紋がもう刃物の鋼にあらわれました。

ひばりはいつか空にのぼつて行つてチークチークやり出します。高い処で風がどんどん吹きはじめ雲はだんだん融けていつていつかすつかり明るくなり、太陽は少しの午睡のあとのようにどこか青くぼんやりかすんではいますがたしかにかがやく五月のひるすぎを搾えました。

青い上着の園丁が、唐檜の中から、またいそがしく出て来ます。

「お折角ですね、いい天気になりました。もう一つお願いしたいんですがね。」
「何ですか。」

「これですよ。」若い園丁は少し顔を赤くしながら上着のかくしから角柄の西洋剃刀を取り出します。

洋傘直しはそれを受け取って開いて刃をよく改めます。

「これはどこで買いになりました。」

「貰ったんですよ。」

「研ぎますか。」

「ええ。」

「それじゃ研いでおきましょう。」

「すぐ来ますからね、じきに三時のやすみです。」園丁は笑って光ってまた唐櫓の中にはいます。

太陽はいまはすっかり午睡のあとの光のもやを払いましたので山脈も青くかがやき、さつきまで雲にまぎれてわからなかつた雪の死火山もはつきり土耳其玉のそらに浮きあがりました。

洋傘直しは引き出しから合せ砥を出し一寸水をかけ黒い滑らかな石でしずかに練りはじめます。それからパチツと石をとりまします。

(おお、洋傘直し、洋傘直し、なぜその石をそんなに眼の近くまで持つて行つてじつとながめているのだ。石に景色が描いてあるのか。あの、黒い山がむくむく重なり、その向うには定めない雲が翔け、溪の水は風より軽く幾本の木は険しい崖からからだを曲げて空に向う、あの景色が石の滑らかな面に描いてあるのか。)

洋傘直しは石を置き剃刀を取ります。剃刀は青ぞらをうつせば青くぎらつと光ります。それは音なく砥石をすべり陽の光が強いで洋傘直しはポタポタ汗を落します。今は全く五月のまひるです。

畑の黒土はわずかに息をはき風が吹いて花は強くゆれ、唐檜も動きまます。

洋傘直しは剃刀をていねいに調べそれから茶いろの粗布の上にてきあがった仕事をみんな載せほつと息して立ちあがります。

そして一足チュウリップの方に近づきます。

園丁が顔をまつ赤にほてらして飛んで来ました。

「もう出来たんですか。」

「ええ。」

「それでは代を持つて来ました。そつちは三十三銭です。お取り下さい。それから私の

分はいくらですか。」

洋傘直しは帽子をとり銀貨と銅貨とを受け取ります。

「ありがとうございます。剃刀のほうは要りません。」

「どうしてですか。」

「お負けいたしておきましょう。」

「まあ取つて下さい。」

「いいえ、いただくほどじやありません。」

「そうですか。ありがとうございます。そんなら一寸向うの番小屋までおいで下さい。

お茶でもさしあげましょう。」

「いいえ、もう失礼いたします。」

「それではあんまりです。一寸お待ち下さい。ええと、仕方ない、そんならまあ私の作つ

た花でも見て行つて下さい。」

「ええ、ありがとうございます。拝見しましょう。」

「そうですか。では。」

その気紛れの洋傘直しと園丁とはうっこんこの畑の方へ五、六歩寄りませす。

主人らしい人の縞しまのシャツが唐檜とうひの向うでチラツとします。園丁はそつちを見かすかに笑い何か云いいかけようとします。

けれどもシャツは見えなくなり、園丁は花を指ゆびさします。

「ね、此この黄だいと橙だいの大きな斑ぶちはアメリカから直じかに取とりました。こちらの黄いろは見ていると額ひたいが痛いたくなるでしょう。」

「ええ。」

「この赤と白の斑ぶちは私わたしはいつでも昔むかしの海賊かいぞくのチョッキのような気がするんですよ。ね。

それからこれはまっ赤かな羽は二重ふたえのコップでしょう。この花びらは半ぶんすきとおっているので大おほへん有ゆう名めいです。ですからこいつの球きゆうはずいぶんみんなで欲ほしがります。」

「ええ、全まったく立派りっぱです。赤い花は風で動うごいている時ときよりもじつとしている時のほうが良いようですね。」

「そうです。そうです。そして一寸ちよつとあいつをごらん下さい。ね。そら、その黄いろの隣となりのあいつです。」

「あの小さな白いのですか。」

「そうです、あれは此こ処こでは一番大切なのです。まあしばらくじつと見詰みつめてごらん下さい。」

い。どうです、形のいいことは「等いっとうでしょう。」

洋傘ようがさ直しはしばらくその花に見入ります。そしてだまってしまいます。

「ずいぶん寂しずかな緑みどりの柄えでしょう。風にゆらいで微かすかに光っているようです。いかにもその柄が風に軋しなっているようです。けれども実は少しも動いておりません。それにあの白い小さな花は何か不思議な合図ふしぎを空おくに送おくっているようにあなたには思われませんか。」

洋傘直しはいきなり高く叫さけびます。

「ああ、そうです、そうです、見えました。」

けれども何だか空のひばりの羽の動かしようが、いや鳴きようが、さつきと調ちようし子しをちがえてきたではありませんか。」

「そうでしようとも、それですから、ごらんなきい。あの花の盃さかずきの中からぎらぎら光つてすきとおる蒸気じようきが丁度ちようど水へ砂糖さとうを溶とかしたときのようにユラユラ空のぼへ昇のぼって行くでしょう。」

「ええ、ええ、そうです。」

「そして、そら、光が湧わいているでしょう。おお、湧きあがる、湧きあがる、花の盃さかずきをあふれてひろがり湧きあがりひろがりひろがりもう青ぞらも光の波なみで一ぱいです。山脈さんみやく

の雪も光の中で機嫌よく空へ笑っています。湧きます、湧きます。ふう、チュウリップの光の酒。どうです。チュウリップの光の酒。ほめて下さい。」

「ええ、このエステルは上等です。とても合成できません。」

「おや、エステルだって、合成だって、そいつは素敵だ。あなたはどこかの化学大学を出た方ですね。」

「いいえ、私はエステル工学校の卒業生です。」

「エステル工学校。ハツハツハ。素敵だ。さあどうです。一杯やりましょう。チュウリップの光の酒。さあ飲みませんか。」

「いや、やりましょう。よう、あなたの健康を祝します。」

「よう、ご健康を祝します。いい酒です。貧乏な僕のお酒はまた一層に光っておまけに軽いのだ。」

「けれどもぜんたいこれでいいんですか。あんまり光が過ぎはしませんか。」

「いいえ心配ありません。酒があんなに湧きあがり波を立てたり渦になったり花卉をあふれて流れてもあのチュウリップの緑の花柄は一寸もゆらぎはしないのです。さあも一つおやりなさい。」

「ええ、ありがとう。あなたもどうです。奇麗きれいな空じやありませんか。」

「やりますとも、おっと沢たくさん山沢山。けれどもいくらこぼれたところでそこら一面いちめんチュウリップ酒しゅの波なみだもの。」

「一面どころじやありません。さらのはずれから地面じめんの底そこまですつかり光の領りょうぶん分ぶんです。たしかに今は光のお酒が地面の腹はらの底そこまでしみました。」

「ええ、ええ、そうです。おや、ごらんささい、向むこうの畑はたけ。ね。光の酒に漬つかつては花椰はなやしき菜さいでもアスパラガスでも実じつに立派りつぱなものではありませんか。」

「立派りつぱですね。チュウリップ酒で漬つかけた瓶びん詰づめです。しかし一体いったいひばりはどこまで逃にげたでしょう。どこまで逃にげて行いつたのかしら。自分で斯こんな光の波なみを起おこしておいてあととはどこかへ逃にげるとは氣取きとつてやがる。あんまり氣取きとつてやがる、畜生ちくしょう。」

「まったくそうです。こら、ひばりめ、降おりて来きい。ははあ、やつ、溶とけたな。こんなに雲うみもない空そらにかくれるなんてできないはずだ。溶とけたのですよ。」

「いいえ、あいつの歌うたなら、あの甘あまったるい歌うたなら、さつきから光の中に溶とけていました。がひばりはまさか溶とけますまい。溶とけたとしたらその小さな骨ほねを何かの網あみで掬すくい上げなくちやなりません。そいつはあんまり手数てすうです。」

「まあそうですね。しかしひばりのことなどはまあどうなろうと構かまわないではありませんか。全ぜん体たいひばりというものは小さなもので、空をチーチクチーチク飛とぶだけのもんです。」

「まあ、そうですね、それでいいでしょう。ところが、おやおや、あんなでもやつぱりいんですか。向うの唐檜とうひが何だかゆれて踊り出おどすらしいですよ。」

「唐檜とうひですか。あいつはみんなで、一いっ小隊しょうたいはありましよう。みんな若いし擲グレナデーア弾兵ていです。」

「ゆれて踊っているようですが構かまいませんか。」

「なあに心配しんぱいありません。どうせチュウリップ酒しゆの中の景色けしきです。いくら跳はねてもいいじゃありませんか。」

「そいつは全まくそうですね。まあ大目まに見ておきましょう。」

「大目まに見ないといけません。いい酒だ。ふう。」

「すももも踊り出ましますよ。」

「すももは牆壁しょうへき仕立したてです。ダイアモンドです。枝えだがななめに交叉こうさします。一中隊はありますよ。義勇中隊ぎゆうちゆうたいです。」

「やつぱりあんなでいいんですか。」

「構かまいませんよ。それよりまああの梨なしの木きどもをご覧らんなさい。枝えだが剪きられたばかりなので
身体からだが一向いっこう釣り合あいません。まるで蛹こなぎの踊おりです。」

「蛹こなぎ 踊おどりとはそいつはあんなまり可かわい哀いそうです。すっかり悄しよげ気けて化かせ石せきしてしまつたようじやありませんか。」

「石いしになるとは。そいつはあんなまりひどすぎる。おおい。梨なしの木き。木のまんまでいいんだよ。けれども仲なか々なか人の命めい令れいをすなおに用もちいるやつらじやないんです。」

「それより向むうのくだもの木の踊おりの環わをごらんなさい。まん中に居いてきやんきやん調ち子こをとるのがあれが桜おうとう桃とうの木きですか。」

「どれですか。あああれですか。いいえ、あいつは油つばい桃ももです。やつぱり巴は丹たん杏ぎやうやま
るめろの歌うたは上じやう手ずです。どうです。行いつて仲なか間まにはいりましようか。行いきましよう。」
「行いきましよう。おおい。おいらも仲なか間まに入いれる。痛いたい、畜ちく生しやう。」

「どうかなさつたのですか。」

「眼めをやられました。どいつかにひどく引ひつ搔かかれたのです。」

「そうでしよう。全ぜん体たい駄だ目めです。どいつも満まん足ぞくの手のあるやつはありません。みんな

ガリガリ骨ばかり、おや、いけない、いけない、すっかり崩れて泣いたりわめいたりむしりあつたりなぐつたり一体あんまり冗談が過ぎたのです。」

「ええ、斯う世の中が乱れては全くどうも仕方ありません。」

「全くそうです。そうら。そら、火です、火です。火が付きました。チュウリップ酒に火がはいったのです。」

「いけない、いけない。はたけも空もみんなけむり、しろけむり。」

「パチパチパチパチやっている。」

「どうも素敵に強い酒だと思いましたよ。」

「そうそう、だからこれはあの白いチュウリップでしょう。」

「そうでしょうか。」

「そうです。そうですとも。ここで一番大事な花です。」

「ああ、もうよほど経つたでしょう。チュウリップの幻術にかかっているうちに。もう私は行かなければなりません。さようなら。」

「そうですか、ではさようなら。」

洋傘直しは荷物へよろよろ歩いて行き、有平糖の広告つきのその荷物を肩にし、

もう一度いちどあのあやしい花をちらつと見てそれからすももの垣根かきねの入口にまっすぐに歩いて
行きます。

園丁えんていは何だか顔が青ざめてしばらくそれを見送りみおくやがて唐檜とうひの中へはいります。
太陽たいようはいつかまた雲の間にはいり太い白い光の棒ぼうの幾条いくすじを山と野原とに落おとします。

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

1996（平成8）年6月20日再版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第九巻 童話2」
「#」はローマ数字、1-13-2

2」 本文篇」筑摩書房

1995（平成7）年6月

入力：土屋隆

校正：川山隆

2008年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

チュウリップの幻術

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>